

農報

術・資材などの
けします。

水稻



水稻営農情報



水稻
吉田 義文
指導販売部
0969-22-1105

中干し後からの水管理

中干し終了後（平年5月末日）から穂ばらみ期前までは、間断灌水で管理し、水と空気を根に補給し根の活力を上げ登熟向上に努めてください。

穂ばらみ期から出穂期にかけては稲の体力消耗が激しくなりますので、深水管理を行いましょう。

穂肥施用

6月上旬より幼穂の観察を行い、穂肥の施用時期を見つけてみましょう。畦から1畝以上水田に入り標本を採ります。標本は株の最長葉の茎を一枚のほ場から3株以上取ります。茎は一枚ずつはいで、幼穂の長さを測ります。長さが1.0～1.5ミリの頃に穂肥を施用します。

穂肥の目安（出穂前25日前後 ----- 幼穂長1.0～1.5ミリ）
稲の葉色を見て適正な量を施用してください。

葉色	4未満	4以上4.5未満	4.5以上
有機苦土047	20 kg	15 kg	施用しない

葉色の判定は、葉色板（カラスケール）を使用してください。太陽を背にして稲の葉色を見ましょう。

病害虫防除

特別栽培においては防除回数に限られていますので、健全な稲作りと畦畔の草刈り等や、ほ場の見回りの徹底による耕種防除と組み合わせた適期防除に努めてください。防除の際は、使用基準を遵守し飛散等のないよう心がけるとともに、栽培管理台帳への記入もお願いします。

果樹



5月の柑橘園管理



果樹
白石 一斗
上島営農指導センター
080-1729-1633

5月になりますと新梢も出揃い始め、いよいよ開花の時期となります。暖かい季節に入りますので、みかんの生育も日に日に進んでいきます。時期ごとにポイントとなる管理を記していますので園の状況をよく観察し、適期管理に努めましょう。

1. 病害虫防除

時期	対象病害虫	薬剤名	希釈倍数	備考
上旬～中旬（開花期間）	訪花害虫	モスピランSL液剤	4,000倍	
	灰色カビ病	ファンタジスタ顆粒水和剤	4,000倍	
中旬～下旬（開花盛期～落弁期）	ホコリダニ	ハチハチフロアブル	2,000倍	
	黒点病、灰色カビ病	ナティーボフロアブル	1,500倍	

※養蜂が行われている地区では、周辺への飛散に注意して下さい。

※花のバラつきがある場合は、ホコリダニの防除でアプロードエースフロアブル（1,000倍）を使用して下さい。

2. 葉面散布

発芽～開花期は前年の貯蔵養分で活動します。新梢の充実と養分補給の為、チッ素主体の葉面散布を行いましょう。また、展葉後は早期に緑化を促進させる為、マグネシウムの葉面散布を行いましょう。

時期	薬剤名	希釈倍数	備考
新梢伸長期～開花期	尿素、アミノジューシー N14	500倍	樹勢維持
	神協スピリッツ	500倍	
	ジューシーカル	800倍	新梢充実
展葉期（5月中旬頃）	葉面マグ	200倍	緑化促進

3. 着果対策（不知火、清見、中生・普通温州）

ジベレリンの散布・・・ジベレリンを散布する事により、生理落果防止につながり着果性が向上します。主に赤道部を中心に散布をしましょう。下の表で規定濃度になりますので、開花始めから満開10日後辺りに散布を行って下さい。また、尿素を500倍加用する事により効果が上がります。

○使用時期・・・開花始め～満開10日後

○ジベレリン希釈表（25ppm液を作る場合）

ジベレリン液剤	40mlの場合	水 8Lに1本	尿素を加用する場合尿素を16g加用する
ジベレリン液剤	100mlの場合	水20Lに1本	尿素を加用する場合尿素を40g加用する

4. せん定の実施（蕾が小豆～大豆大の頃）

冬期のせん定を控えていた所などでは、必要に応じて実施して下さい。特に樹冠内が込みあっている所では間引きを行い、樹冠内に光が入るようにしましょう。せん定量については、軽めをお願いします。



施設栽培の土づくりについて



花卉
竹川 慶剛
上島営農指導センター
080-1729-1637

「土づくり」とは作物の根の育つ環境を整える事です。健全な根が育てば養分を吸収する力が向上し、施肥量を削減したり、作物自体が丈夫になることから農薬の使用量も減らすことができます。

また、土づくりを行わないと連作障害の原因にもなります。

連作すると土壌はどう変わるか？

- (1) 一般に作物を栽培すると、土壌の養分（窒素、リン酸、カリ、カルシウム、マグネシウム、鉄、亜鉛、銅、マンガン、ホウ素など）は植物という有機物となって、地上に持ち出される。6元素については肥料として施用するが、微量要素はほとんど補給されません。
- (2) 施設土壌では降雨の影響を受けないことや、地表面からの蒸発によって下層から上層への水の動きとなるため、塩類の集積を招くこととなります。
- (3) 乾燥した状態での機械耕運は、土を圧縮させ、耕土盤の形成空気相を減少させ、また、土の粒子が小さくなります。
- (4) 同じ植物を連作すると、微生物相が偏ってきます。

上記の事を改善するために



「土づくり」の4つのポイント

①排水対策

土づくりで最も重要な対策です。

圃場内の排水が悪い場合の原因として、作土下に緻密な層がある。圃場周りの用排水状況など、色々な場合が考えられます。

②有機物投入

土の物理性、科学性、生物等、土づくりの基礎になります。

長年、科学肥料に頼った栽培を続けると土壌中の有機物含量が減少し、土が乾きやすかったり、フカフカした感じがなくなったり、土壌病害が発生しやすくなります。完熟堆肥や粗大有機物など定期的に適量施用します。

③深耕

根の生育環境を整えます。作物に合った作土深を確保します。

収穫後、畝を崩す前に作土の深さを確認します。深耕を行う場合は、下層の土壌性質を調べた上で、除々に深く耕すようにして下さい。

④土壌診断

圃場の状態を把握することから、適正な施策が生まれま

す。前作に施用した肥料分は前作で利用しているのが理想ですが、一般的にはある程度肥料が残っています。次作の肥料設計に整えて土壌分析を実施し養分状態を把握します。特に、栽培期間におけるpH等の矯正は難しくなるので、事前にチェックしておきます。



春インゲン今後の管理



野菜
小林 優介
上島営農指導センター
080-1729-1635

これからの時期は、ハウス内温度、湿度共に高くなってきます。このため、灰色カビや、品温の上昇による蒸れ等発生しやすくなりますので、防除や収穫後の管理、換気等は注意をお願いします。

温度管理

15～25℃で日中30℃以上にならないように注意してください。

灌水・追肥

極端な乾燥は、収量・品質に影響するので、着莢後は少量多回数の灌水を行いスムーズに太らせませす。草勢を見ながら行い、後半は液肥で行います。

- 例) 穴肥 アサヒエース
液肥 トミー液肥ブラック等 (500倍)
葉面散布 メリット青 (500倍)

摘葉

摘葉は収穫を行いながら行い、老化葉・病葉・込み合う葉を摘葉し通風、採光を良くし、病害虫の発生を抑制しましょう。一度に沢山摘葉をすると樹勢の低下につながるため注意が必要です。

病害虫防除

ヨトウムシ類、マメハモグリバエ、スリップス等

農薬名	使用回数	使用時期	使用回数	対象病害
アフーム乳剤	2000倍	収穫前日	2回	マメハモグリバエ
プレオフロアブル	1000倍	収穫前日	2回	ハスモンヨトウ、ハモグリバエ
カスケード乳剤	2000倍	収穫前日	2回	マメハモグリバエ
パダンSG水溶剤	1500倍	収穫前日	3回	マメハモグリバエ

灰色カビ病

農薬名	使用回数	使用時期	使用回数	対象病害
セイビアーフロアブル20	1000～1500倍	収穫前日	3回	灰色カビ、菌核病
アミスター20フロアブル	2000倍	収穫前日	3回	灰色カビ、菌核病